豊明希望チャペル礼拝

2026/11/1

「主イエス・キリストの名のために」

使徒の働き 15：22～40

今週 3 日に行われる、JECA 中部地区のオータムフェス(オータムキャンプ)のプログラムです。テーマは、詩篇 118：24 からで、「この日を喜ぼう」だと、そして、こうあります。「21 教会、下は 0.5 歳から上は 96 歳まで、221 人が参加しています。主にある交わりの豊かさ、恵みを共に喜びましょう！」と。



前に、豊明を含む 3 教会の牧師達が集まって、今年のオータムキャンプはどうしようか？と考え始めたところから始まったことを前にお話ししました。

若い人に参加して欲しい、中部地区の教会が一年に一度しか集えない機会だから、お話しを聞くだけではなくて、「交わり」を密にしたい。出来れば、たくさんの教会の特徴や賜物が生かせる会でありたい・・色々な要望が出ているうちに、素晴らしいが、それをまとめるのは大変なことだと思えてきました。しかし、なぜか、途中で、「無理」だとも「出来ない」だとか、誰も言うことなく、各教会や兄弟姉妹の要望を、全部受け止めて、ついにここまで来てしまったという感じです。

とにかく、「全部受け止めて」というところが、今回の特徴の一つかと思います。先週の火曜日に、担当者数十人がズームで会して、それぞれの担当ごとに、顔見せと、最終準備をするときを持ちました。あまりにも人が多く、誰が誰やら分からなくなるか、発表者は、首から要点と名前を書いて、発表したらいいのではないかとアイデアが出ました。たくさんの発表がありすぎるから、司会者は、名前だけ紹介してあとは・・等々、細かく打合せをしました。中には、そんな短時間では発表しきれないという不満？意見も出ました。グループラインでは、毎日数十件の課題が出され、そのたびに、意見をまとめて、一日中考えなければ、話しについていけないという程になりました。しかし感謝します。そして祈りたいと思います。

今日は、冒頭で、なぜこのような話しをしたかと言いいますと、まさに、今日の箇所も、初代教会が、ある一つのテーマを巡って、話し合いを重ね、結論に至る過程が、特に今日は細かくルカによって記載、報告されているからです。そして、そこには、対立や、ある意味での妥協、さらには、分裂までが、隠すことなく報告されているのです。まさに、教会とは、こうである、対立と話し合い、折り合い、こういう営みを繰り返して、主の宣教の業は、進むものなのだと、教えられているように思うからです。



今日の箇所は、長い箇所ですので、最初に、どういう事が報告されているかをまずは、ざっと見ていきます。

前回のところに話しを戻しますと、パウロとバルナバによる宣教によって救われた異邦人たちに、ユダヤ人の割礼の習慣を適用すべきか否かというのが議題で、アンティオキア教会から、パウロとバルナバが出かけて、宣教報告と併せて、エルサレム教会で話し合いがなされました。

結論は、今日のところにもあらためて書いてある通り、必要ないということでした。こういう但し書きを付けて。

「15:28 聖霊と私たちは、次の必要なことのほかには、あなたがたに、それ以上のどんな重荷も負わせないことを決めました。15:29 すなわち、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、淫らな行いを避けることです。これらを避けていれば、それで結構です。祝福を祈ります。」」

前回、少し触れたとおり、異邦人の不道徳で偶像的な習慣は、やめるべきで、その事が守れていれば、割礼を受けなくても洗礼を受けて良い、教会員として認める、クリスチャンとして認めるという内容でした。

ローマ人への手紙などに見られる「信仰義認」の法則から言えば、信じるだけでいい、それ以外のことは、救われるための条件とならないという原則から言えば、もちろん、クリスチャンになって、上記のようなことが行われていれば、それはダメですが、少なくとも、救われる条件にはならないはずでした。

先週の宣教ではありませんが、それは、ローマ人への手紙の「できる限り」あるいは、「ただし」の内容です。

ユダヤ人には、こんな断り書きは、神の国の者とされた人は、それらしく振る舞うのは、当然のことですから、必要ないのですが、ここで書かれていることが、

それが何の問題があるの？という感覚でしたから、ある意味で、こういう例外的な言い方が必要だったと言う事です。

しかし、いずれにしても、割礼の縛りはありませんよという決定は、ただちに、アンティオキア教会に伝えられます。そこで注目すべきは、パウロとバルナバだけが帰ればいいものを、エルサレム教会から、二人の信徒も同行します。その目的は、エルサレム教会の決定を保証するためでした。

「15:22 そこで、使徒たちと長老たちは、全教会とともに、自分たちの中から人を選んで、パウロとバルナバと一緒にアンティオキアに送ることに決めた。選ばれたのはバルサバと呼ばれるユダとシラスで、兄弟たちの間で指導的な人であった。」

さらには、決定文が書かれた文書も持参しました。これも、証人か、文書のどちらかがあれば、十分とも思うのですが・・

「15:23 彼らはこの人たちに託して、こう書き送った。「兄弟である使徒たちと長老たちは、アンティオキア、シリア、キリキアにいる異邦人の兄弟たちに、あいさつを送ります。15:24 私たちは何も指示していないのに、私たちの中のある者たちが出て行って、いろいろなことを言ってあなたがたを混乱させ、あなたがたの心を動揺させたと聞きました。15:25 そこで私たちは人を選び、私たちの愛するバルナバとパウロと一緒に、あなたがたのところに送ることを、全会一致で決めました。15:26 私たちの主イエス・キリストの名のために、いのちを献げている、バルナバとパウロと一緒にです。」

まだ、正確な決定が出されていないのに、指示していないのに、エルサレム教会の人間が、割礼は条件だよ、無割礼はゆるさないよと言ったことを、混乱させ、動揺させたことを認めています。そして、ある意味で、謝罪の心を込めて、あらためて、これが教会の正式な決定ですと謝罪訂正の文書が付け加えられたのです。

また、あえて、こう付け加えています。

「15:26 私たちの主イエス・キリストの名のために、いのちを献げている、バルナバとパウロと一緒に・・」エルサレム教会の信徒を送りますと。

イエス・キリストのために命を献げている、命がけである事を私たちは、感銘を受け、感謝していると言っているのです。話し合いの内容が、ただ、ああであればこうというような単なる話し合い以上に、そこには、信仰があり、神への愛があり、献身があったこと、そのことこそ、この決定の背後にある理由の一つだとでも言うようにであります。



まるで、ついでに、エルサレムの土産品、みやげを持たせたいが、そのおみやげは、私たち二つの教会の宝、パウロとバルナバです、イエス・キリストのためにいのちを献げている二人です。これこそ、私たちの共通の宝ですね、よき神からのプレゼントですねとでも言うようにです。

この熱い心のこもった手紙は、アンティオキア教会の人々の心を熱くします。

「15:30 さて、一行は送り出されてアンティオキアに下り、教会の会衆を集めて手紙を手渡した。15:31 人々はそれを読んで、その励ましのことばに喜んだ。15:32 ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、力づけた。」

23 節から 29 節までの手紙の内容を読むと、謝罪、受け入れは、読み取れますが、ここにある、「励まし、力づけ」があったとすれば、全体として、アンティオキア教会の現状を良く理解してくれたこと、理解してくれた上で、ユダヤ人が、そのアイデンティティーを捨てるような決定を、私達異邦人のために、してくれたこと、それが、あったと思います。

もちろん、それは、聖書の原則、信仰義認の教えに基づくもので、当然と言えば当然ですが、それでも、その当然のことを、当然として決断するには、あなたがたユダヤ人には、相当の痛みと決断があったでしょうことを、良く理解したと言う事だと思います。



そして、実に丁寧に、エルサレム教会から代表の二人を送り、それだけではなくて、手紙をもたせて、パウロらに読ませたこと、この何と言いましょうか、一連の気配り、あるいは、丁寧さに、彼らは、エルサレム教会の信徒たちの愛を感じたのだと思います。今回の事で、決定の内容はもとより、使者派遣、手紙持参に、ただ、贈り物を手渡すだけではない、風呂敷に包んで、その心まで届けようとする教会の姿、あるいは、クリスチャンのあり方に特に、心を動かされるのです。

山室軍平は、ここに、キリスト者の礼譲（へりくだって礼儀を尽くすこと）があらわされていると言い、クリスチャンたるもの、いくら神様によって自由人とされたからといって勘違いしてはならない、礼儀をわきまえ、あいさつにしても、人に何かを頼む場合も、謝る場合も、人一倍礼儀を尽くす、誠実に人と接する人でなければならないと言いました。そんな教会の姿を見るのです。

さて、パウロは、このエルサレム教会のあたたかい決定を、アンティオキア教会に伝える他に、伝えたい人たちがありました。それは、アジアヨーロッパで、救われてパウロらのために祈ってくれている、異邦人の地の教会の兄弟姉妹達でした。

すなわち「**15:36 それから数日後、パウロはバルナバに言った。「さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか。」**」

丁寧で心のこもった愛の贈り物は、このように、次の愛を生むのですね。伝播(でんぱ)するのですね。たった一人に対する愛であっても、それは、次の愛を生む、それが、主にある愛を行おうとするクリスチャンの営みであり、主にあるの偉大さだと思うのです。



今回、豊明希望チャペルで、がんカフェの試みを祈っています。それは、今回のオータムフェスの「地域への宣教」のテーマでK兄によって、報告される予定ですが、それはまさに、この異邦人の「地域」の人々を愛すため、主の愛と福音を伝えるためであります。この祈りが出されたのは、H兄からです。私が思うのは、H兄の出身教会の、あの津の地域にへばりつくようにして、地域の人々に寄り添い、神

の愛を伝えようとする、地域の子供たちへ、またお年寄りたちへの試みであります。その経験があったからこそ、その愛の働きの身近にいたＨ兄と無関係ではないと思っています。そう、伝播した結果だとも思っています。

小さな一つの愛であっても、それは、次の愛を生む、それが、教会の姿であり、人の力を超えた聖霊の働きだと思うのです。

ただ、ルカは、現実の社会に生きる教会の現実を最後に隠すことなく付け加えます。それは、具体的には、次の宣教計画に対する意見の相違であり、意見の対立でした。

「15:37 バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネを一緒に連れて行くつもりであった。15:38 しかしパウロは、パンフィリアで一行から離れて働きに同行しなかった者は、連れて行かないほうがよいと考えた。15:39 こうして激しい議論になり、その結果、互いに別行動をとることになった。バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行き、15:40 パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。」

世界で最初の記録された教会会議の決定、ここまで丁寧に、愛にあふれたやりとりの中で決められた教会の業も、いささか強調すれば、最初から対立し、いわば分裂して始まったのだと、ルカは正確に、隠すことなく伝えていると言うことです。ＦＦブルースという神学者は、ルカはここで、教会がなすことであっても、体裁良く何かを繕おうとしないその覚悟を感じると言いました。

さて、今日は、初代教会の姿を見て、そこにある、クリスチャンの丁寧な愛、同時に弱さを見ました。

今週の私たちの歩み。イエス・キリストの十字架とその愛に触れた者として、一つの小さな業にも丁寧な愛をもって臨み、挫折や修正にも謙遜に、あきらめずに前に進みたいと願うのです。